劇団ＦＡＸ第８回公演

『だから、やだっていったじゃない』

『うるさい』作・奥殿純

図書館か静かな喫茶店
川村がパソコンを取り出す
川村「やっぱりマックが欲しかったな～」
パソコンにリンゴを張り付け、かじりリンゴのあのマークにする
川村「よし」

川端が入ってくる
しばらくふたりとも作業している
川村盛り上がってきてでかいエンターキーを取り付けガンガンやり始める
だんだんと気になってくる川端
ちらちら見ても気づかない、すごい見つめてみてもとまらない
咳ばらいをかける

川端「ちょっと、あのお…」
川村「…」
川端「あのすいません」
川村「はい。あはじめまして（すごいおしとやかな小さい声で）」
川端「え、声ちっさ。声はそんな小さいんすか」
川村「まあはいそんな感じです。なんでしょう」
川端「いやあのですね、ちょっといいにくいんですけど、さっきから気になるんですよ」
川村「え、え！なんですか急に！line でも交換します？（ケータイふるふる）」
川端「ちがうちがうそんなわけないでしょ」
川端「（ため息）」

川端、何か言うのはあきらめてイヤホンをつける
奥殿やってくる。川端を挟むかたちで座る。
作業し始めるがとなりの川端のイヤホンの音量がでかすぎて気になる
奥殿もめっちゃ見つめて視線を送るがきづかない。咳をかけて、川端も咳をかける
座る

奥殿「あの」
川端「…」
奥殿「あのすいません（かた叩く）」
川端「（振り返り大きい声で）はい」
奥殿「あの音漏れしてますよ」
川端「はい」
奥殿「音うるさいんで小さくしてもらえませんか」
川端「え、なんですか」
奥殿「だから音を下げてもらえませんか！」
川端「ああ下げる！」
奥殿「そうです！」
川端「ああおっけいです。じゃあさげちゃいますね。このボタン押したら下がりますからね、

川端「さっきからずっと指をとんとんとんとんとんやってるじゃないですか。それあのうるさいんでやめてほしいんですよ」
川村「えそんなんやってました」
川端「はい、こうやって」
川村「ほんとすか。でもこれそんなうるさいですか」
川端「いやその音量的にはそんなですよ。でもなんていうんですかその一一定ペースのリズムがなんかこうかき乱すんですよ心を。んにゃあ！ってなるんですよ」
川村「そんなですか。気を付けますね」
川端「お願いします」

ちょっとの間は、静か
しかし今度は独り言がはじまる

川村「…（一発目でかく）そーだよな！そりゃむりかーいやーまあそうだよな。いやわかってたよ？そんくらいわかってたよ。でもそこをなんとかするのが、俺。（などと独り言）」
川端信じられないという反応
川端が何かを言いかけるときに、川村が最高潮の独り言

川村「…らあっ！」
バスっと目が合う
川端「……（絶句）」
川村「どうしました？」

いきまーす音量下がるまでさーん、にーー、いーち…あっはははは音量上げてたわはははh」
奥殿「こるあああああ！イヤホン外せやこらあ。このイヤホンケツの穴から突っ込んで右目と左目ブイブイ言わせたろかこらあ！！」
川村「うるせええてめらのけつの穴からそのイヤホン突っ込んで右目と左目ブイブイ言わせたろか！」
川端「ていうか一番うるさいのこいつですよ。あなたが来る前も指とんとんしたり、でかい独り言ったり」
奥殿「そうなんですか。それでイヤホンを？」
川端「そうです」
奥殿「なんかすいませんでした」
間
奥殿「プリキュア聞いてました？」
川端「何がですか」
奥殿「いやさっき、プリキュア聞いてました？大音量で」
川端「聞いてませんよ」
奥殿「いやあれプリキュアでしょ？絶対そうでしょ？」
川端「いや違いますよ。なに言ってんですか蹴落としますよ。てかなんでプリキュアってわかるんですか」
奥殿「なにがですか」

川端「例えばぼくがプリキュア聞いてたとして、いや、違うんだけど、聞いてないですけど、そうだとしてなんでわかるんですか。それってつまりあなたがプリキュア聞いてるってことじゃないですか」
奥殿「…」
川端「えなんでだまるんですか。もしかしてそうなんですか」
奥殿「…はい」
川端「ふっ」
奥殿「いま笑ったか！」
川端「笑ってないですよ」
奥殿「そういいつつ笑ってんじゃねえか！ああ聞いてますよ歌ってますよ踊ってますよ！大好きだよプリキュア。プリキュア好きがここに二人。まさに二人はプリキュ…」
川端「やめてください。僕ほんとに聞いてませんから。あなたが好きすぎてそう思ったんじゃないですか」
奥殿「じゃ何聞いてたんだよ」
川端「コブクロ」
奥殿「だいたい一緒だろ」
川端「全然ちがうでしょ」
奥殿「コブクロはおまえ、J-POP界のプリキュアだろ」
川端「違うわ。言われてないわそんなん」

川村こうしているあいだにもうるさい。貧乏ゆすりで机ががったんがったん。

川端「うるせええええーー！！（飛び蹴り）」
川村「いって。何すんじゃごるあああああ！（なぐりかかる）」
川端「ああああすいませんすいません。あ、そうだこの人プリキュア聞いてるらしいですよ」
川村「え？」
奥殿「え？」
川村「そうなの」
奥殿「なんでいまいったの」
川端「いや殴られそうだったから」
奥殿「おれのプリキュアを盾にしてんじゃねえよ」
川村「え、なんで聞いてるんすか」
奥殿「なにがですか」
川村「好きなんすか」
奥殿「いやわかんない」
川村「好きなんすか」
奥殿「わかんないす」
川村「好きなんすか」
奥殿「わかんないって」
川村「わかんないってなんすか。好きなんですか」
奥殿「大好きです」
川村川端「（引く）」
奥殿「いやいやそれは良いでしょ～。好きなのは自由じゃーん」
川村によっていくが引かれる
川端にもよっていくが引かれる
川端「触らないで」
奥殿「ていうかねあなたさっきからうるさいんすよ。独り言とか！貧乏ゆすりとか！」
川端「やほんとそれな」
川村「しょーがないでしょ、こっちは一世一代の勝負やってんすから」
奥殿「なんだ一世一代の勝負って」
川村「テレビのワイプをぐっと拡大してそれだけの動画を作る」
奥殿「どうでもいいわそんなん。静かにやってくれよ」
川端「静かにやれよまじで」
川村「いや結構抑えてるつもりだったんだけど」
奥殿「いやいや」
川端「いやいやいや」
川村「じゃあもうちょっと気を付けます」
奥殿「ほんとおねがいします」
川端「もうちょっとじゃなくてすげえ気をつけろ（ブーイングの手）」
川村「てめえなんなんだ（掴みかかる）陰からよお」
川端「ぎゃあ助けて」
奥殿「いやうんこれは仕方ないわ」
川端「やめてたすけて！プリキュア！」
奥殿「プリキュアじゃねえわ。プリキュアが好きな、成人男性だ」
川端「死ぬ死ぬ！」

形成が逆転して川端が首を絞め始める

川村「しぬしぬ！」
奥殿「ええええ逆じゃない？！」

川村、死す

川端「やっちゃった…」
奥殿「えまじで」
川端「やばい、逃げよ」
奥殿「うん逃げよう」

川村なんか言っている

奥殿「うん？ん？」
川端「なに？」
奥殿「なんか言ってんな」
川端「生きてんの？」

二人近寄っていく

川村「（でかい声で）○○！！」
川端奥殿「うるせえよ！」

（終わり）

『動物園のパンダ』作・玉井秀和

父と娘シリーズ。

父：高野くん
娘：川本さん

何気ない日常。
どこにでもいる貧乏な家庭のリビングである。

娘「ねぇ、とうちゃん。ねえ、とうちゃん」
父「どうしたんや、あやこ？」
娘「あんな。動物園行きたいんや」
父「動物園？　なんでや？」
娘「あんな。パンダ、見たいんや」
父「パンダ？」
娘「そうや、パンダや。なんやとうちゃん、パンダ知らんのか？」
父「あやこ。パンダはな、架空の生き物なんやで」
娘「え、うそや」
父「ほんまや～。じゃあ、パンダってどんなんかゆうてみぃ」
娘「あんな、基本白やねんけどな、たまに黒があんねん」
父「白が基本なんか？」
娘「そうや。あれ？　黒かな。どっちやろ」
父「な？　瑗珠やろ？」
娘「でも、白黒でおるねんよ」
父「それはな、昔の話や」
娘「えぇ？」
父「昔テレビが白黒だったんは知っとるやろ？」
娘「知っとる」
父「その時に、テレビにきれいに映るようにって、白黒にしたんや」
娘「え、じゃあ、ホントのパンダは白黒じゃないん？」
父「赤緑や」
娘「クリスマスや～。クリスマスや～」
父「思ってたんとちゃうやろ？」
娘「ちゃう。全然ちゃうで！　トナカイよりよっぽどサンタさん乗っとるで」
父「みんな白黒やと思っとる。でもな、こんなデジタルなご時世に白黒のパンダなんておらんのじゃ」
娘「じゃあ、赤緑のクマっぽいやつなんやな」
父「クマちゃうで」
娘「え、嘘や。クマみたいな見た目しとるで」
父「嘘ちゃう。あれはな、イメージ画像や。ほら、交番の前にも似顔絵はっとるけど、実際捕まったら全然似とらんやろ？」
娘「似とらん」
父「それと一緒や」
娘「じゃあ、ホンマはなんなんや？」
父「ホンマはな、ただの箱じゃ」
娘「箱？」
父「そうじゃ。段ボール箱じゃ」
娘「嘘や」
父「嘘ちゃうで。段ボールをフォトショップで加工しとるんや」
娘「フォトショップ使っとるんか？」
父「そうや。そうやないとあんな可愛いのがおるわけない。可愛いやろ。パンダ」
娘「かわえぇ」
父「可愛すぎるやろ？」
娘「かわいすぎる」
父「そんなかわえぇの実際におるわけないやろ？」
娘「おるわけない」
父「フォトショップや～」
娘「フォトショップなんか。え、じゃあ石原さとみは？」
父「フォトショップや～。あんな唇あるわけない」
娘「北川景子は？」
父「フォトショップや～。整いすぎてる」
娘「水トちゃんは？」
父「水トちゃんは、おる」
娘「水トちゃんはおるんか」
父「おらんわけがない」
娘「そうやったんや」
父「えぇか、あやこ。水トちゃん以外は段ボール箱や」
娘「衝撃や」
父「そうやって人は成長するんや～」
娘「あやこも成長した」
父「あやこも成長したな」
娘「やっぱ、パンダ見に行かんでえぇわ」
父「なんでや？」
娘「だって、赤緑の段ボール箱やねんやろ？」
父「せや？」
娘「じゃあ、えぇ」
父「でも、赤緑の段ボール箱が檻に入っとるんも見たことないやろ？」
娘「ない」
父「ものは試しや～。そうやって人は大人になっていくんや」
娘「そうやって大人になるんか」
父「ほら、あやこ。動物園、いくで～」

二人は手をつないで、動物園に行くのであった。

おしまい

『怪談』作・玉井秀和

怖い話研究社。

人

副理事長：川村。この人がしゃべるとなんでも怖い。

社員：奥殿。部長のことを敬愛している。

拷問されている人：高野。悪いことをして、怖い話を聞かされそうになっている。

警察：男。ちょっとだけ出てくる。

ここは留置所。一人の男が監禁されている。罪はわからないが、きっと非常に重い罪を追っているに違いない。

高野「何一つ凹凸のないコンクリートの壁。唯一の逃げ道である窓にも届きやしねぇ。もう終わりか」

扉があき、警察が入ってくる。

高野「なんだよ。今月のラッキーアイテムでも教えに来たのか？」

男「ふたご座はブルートゥースだ」

高野「けっ。なんだよブルートゥースって。ブルートゥース機能のついた機材を持てばいいのか？　それとも、俺自身がブルートゥーススピーカーになればいいのか？　もし後者だとしたら俺はもうお前のアイフォンとつながってる。試しにやってみな。好きな音楽をかけてみればいいさ」

男、スマフォをいじる。

高野からyoutube の広告が流れる。

高野「youtube でお金が稼げるって知ってますか？　パソコン1台で稼ぐ！　新たなyoutube ビジネス。顔出しせずに月10万円以上！　あなたはyoutube で稼ぐことに興味がありますか？　興味のある方は動画説明欄をチェック！」

男、驚く。

高野「けっ。ついに口からアフィリエイト広告を出すようになっちまった。もう、終わりだ。人生が積んじまっている俺にこれ以上何をしようっていうんだ」

男「お前に自分のした罪の重さを教えてやろうと思ってな。専門家を呼んでいるんだ。どうぞ」

川村・奥殿入ってくる。

男「お前が一番嫌いなものはなんだ」

高野「それを言って何になる」

男「質問しているのは俺だ」

高野「、、、怖い話だ」

男「ふふ。この方は日本怖い話研究会副理事補佐官代理の川村さんだ」

高野「どっちの野郎を紹介をしたんだ。わからねぇ。さらに副理事、補佐官？　代理？　まず副理事の補佐なのか、理事補佐の副なのかがわからねぇ。そのわからねぇ奴のさらに代理だと。じゃあもう誰なんだ！」

奥殿「日本怖い話研究会副理事補佐官代理の川村さんの専属ドライバーをやっております奥殿です」

高野「副理事補佐官代理じゃないほうが返事をしただと。じゃあ、その背の高いほうが」

男・奥殿「副理事補佐官代理の川村です」

高野「怖い！　なんで本人以外が口を開くんだ。そしてなんであいつは口を開かねぇんだ」

奥殿「川村さんの口はいわばパンドラの箱です。ひとたび開いてしまえば、この世の中に災いが降り注ぐでしょう。そうでしたね？」

男「えぇ。そうです」

高野、驚愕。

男「では、私はこれで」

奥殿「はい」

男、はける。

奥殿「高野さん。今日はあなたに、自分のカルマを理解してもらうために、レクチャーをしに来ました。あなたは川村さんがここにいるという意味を、ミーンをしっかり理解したほうがいい。イミーン。意味とミーンでイミーン。覚悟はできているんでしょうね」

高野「覚悟はもうずっと前からできているが、イミーンが気になって話が全然入ってこねぇ。ミーンの意味は意味だから、イミーンになったら意味は意味意味になるのか？　ん？　だめだ。何の話をしているんだ。もう好きにすればいいさ」

奥殿「よろしい。では、始めましょう。川村さんこちらに」

川村、椅子に座る。ブーブークッションが鳴る。

高野、驚愕。

川村「水を頂いてもいいですか」

奥殿「怖い話というのは、話だけで成り立つものではありません。照明・音響・その他さまざまな要因により成り立っているのです。まずはこの音楽を聴いてください」

奥殿、スマフォをいじる。

高野からyoutube の広告が流れる。

高野「youtube でお金が稼げるって知ってますか？　パソコン1台で稼ぐ！　新たなyoutube ビジネス。顔出しせずに月10万円以上！　あなたはyoutube で稼ぐことに興味がありますか？　興味のある方は動画説明欄をチェック！」

奥殿、驚愕。

間

奥殿、もう一回やってみる。
高野からyoutube の広告が流れる。
高野「youtube でお金が稼げるって知ってますか？　パソコン1台で稼ぐ！　新たなyoutube ビジネス。顔出しせずに月10万円以上！　あなたはyoutube で稼ぐことに興味がありますか？　興味のある方は動画説明欄をチェック！」
奥殿、驚愕。
奥殿、もう一回やってみる。
高野「やめろ！　もうやめてくれ！」
高野からyoutube の広告が流れる。
高野「youtube でお金が稼げるって知ってますか？　パソコン1台で稼ぐ！　新たなyoutube ビジネス。顔出しせずに月10万円以上！　あなたはyoutube で稼ぐことに興味がありますか？　興味のある方は動画説明欄をチェック！」
高野、息が荒い。疲弊している。
高野「もう、、、やめてくれ、、」
奥殿「どういう仕掛けなんです？」
高野「ふたご座は、ブルートゥースなんだ」
奥殿「ちょっと何言ってるかわかりませんが」
高野「そうだろうよ。俺だってわからねぇ。しかもよりによってアフィリエイト広告ばかり流れてきやがる」
奥殿「今年から、youtube の規約が変更されましたからね」
高野「くそっ。それがいったい何の関係があるっていうんだ。わからねぇ」
川村「水を」
奥殿「意味のないと思っていた話が本当は意味がある可能性ももしかしたらゼロではないかもしれませんよ」
高野「ダメだ。話が抽象的過ぎてわからねぇ」
奥殿「いつまで強気でいれますかな」
高野「何ならもうちょっと折れてるよ」
奥殿「あなたは今から恐怖におののくことになるでしょう。いきますよ」
高野から、JUJU が流れる。『明日がくるなら』
♪明日がくるなら、何もいらないよ、ただ君だけに♪
奥殿「どうです？　怖いでしょう」
高野「あぁ、怖いよ――――♪笑ってて♪――――お前がこれを怖い曲だと思って流しているなら――――♪ほしいから♪――――本当に怖いよ――――♪いつでも♪」
川村「奥殿くん」
奥殿「この曲はあなたの深層心理を表している。あなたは怖いんだ。今から怖い話をされるのが怖いんだ。そうでしょう高野さん。わかりますよ。私は川村さんの専属ドライバーですからね」
高野「そうだ、こいつはただの専属ドライバーだ」
奥殿「これからが本番です。高野さん。あなたは今から、JUJU を歌いながら川村さんの怖い話を聞くことになる。果たして耐えられますかな」
川村「奥殿くん」
高野「耐えられるか耐えられないかで言ったら、耐えられないだろうよ。JUJU に俺の喉が耐えられないだろうよ」
奥殿「他のアーティストにしてもいいんですよ。私の手数がJUJU だけだと思ったら大間違いです」
高野「じゃあ、その、手数ってのを見せてもらおうか」
川村「奥殿くん」
奥殿「いいんですか？　もうJUJU には戻れませんよ？　後悔しませんか？」
川村「奥殿くーん」
高野「いったい誰を流そうって言う――――！　まさか！」
奥殿「そのまさかです」
高野「嘘だろ、本当にそんなことをする奴がいるのか。嘘だとしか思えねぇ。非人道的だ！」
奥殿「私は日本怖い話研究会副理事補佐官代理の川村さんの専属ドライバーですからね。もはや私は人間を超越している」
高野「やめろ！　やめてくれ！」
高野、宇多田ヒカル『オートマチック』を歌う。
高野「はぁ、はぁ」
奥殿「これを歌って、まだ理性を保っていられるとはあなたも大したものだ」
川村「奥殿くん」
高野「宇多田ヒカルだけは、宇多田ヒカルだけは、素人が歌ってはいけないって小学校の道徳で習わなかったのか？」
奥殿「私は、人間を超越しているので。さぁ、次に行きましょうか。いつまで持ちますかな」
高野「はぁ、はぁ」
奥殿、スマフォをいじる。
高野からyoutube の広告が流れる。
高野「youtube でお金が稼げるって知ってますか？　パソコン1台で稼ぐ！　新たなyoutube ビジネス。顔出しせずに月10万円以上！　あなたはyoutube で稼ぐことに興味がありますか？　興味のある方は動画説明欄をチェック！」
高野「やめろ！　もうやめてくれ！　せめて広告をスキップしてくれ！」
♪あ～あ～あああああ～あ～♪
高野、『北の国から』を歌いだす。

高野「怖い。怖いよ。お前の選曲が怖いよ」
奥殿「それでは、川村さん。お願いします」
間（川村、ついに水が飲めると思い、うれしい）
川村「ちょっと水をもらってもいいかな――――」
高野「あ～あ～あああああああ！」
奥殿「どうしたんですか高野さん。　川村さん抑えて！」
川村「水もらっても――――」
奥殿「川村さん！　早く！」
川村「少し水を」
奥殿「川村ぁ！」
川村「は、はい！」
川村、高野を抑える。
川村「熱い！　熱い！　人肌が熱い！　喉が渇く！　喉が！　渇く！」
奥殿「どうしたんですか高野さん。覚悟はできているんじゃなかったんですか？」
高野「できてるつもりだった。できてるつもりだったが、全然できてなかった」
奥殿「なんで嘘つくんですか！　私が最初に覚悟はできてますかって聞いたら、あなた、できてますって言いましたよね？　言いましたよね？　私はそれを信用しましたよね？　そうですよね？　それで、いい感じに、お互いいい感じに、信頼関係をつくって、その上でここまで来ましたよね。来たのに！　ここまで来て最初の、その土台の部分を、あなたは崩したんですよ！」
川村「水を」
高野「すまねぇ。できてるつもりだったんだ。俺も本当は覚悟ができていないことに気が付いたときにびっくりした。びっくりして屁が出た。なんならちょっとミが出た。ミが出た時の音はソだったがな。絶対音感なんだ、俺。絶対音感なんだ、俺。だから奥殿さん。こんな俺を見捨てないでくれ」
川村「水ください」
高野・奥殿「ちょっとうるさい！」
川村「、、、」
奥殿「何を言っているんですか高野さん。あなたは一度私を裏切ったんですよ。例えるなら」
高野「すまねぇ。裏切った。俺が悪かった」
奥殿「どうして謝るんですか！　どうして例えを言う前に謝るんですか！　私は！　あなたに謝ってほしいわけじゃないぃ！　私は！　あなたと！　もう一度、もう一度信頼関係を築きたいだけなんだ！　もう一度！　あなたと！」
高野「すまねぇ奥殿さん。例えを言う前にしゃべりだしてすまねぇ！」
奥殿「謝んないでくださいぃ！」
高野「謝んねぇ。俺はもう謝んねぇ！」
奥殿「高野さぁん」
高野「奥殿さぁん」
二人、抱き合う。
川村「水、、ください」
奥殿「もう一度、はじめっから。信頼関係を築き上げていきましょう」
高野「はい。よろしくお願いします。あ、あれですかね、まずは名刺交換からですかね」
奥殿「あ、私、日本怖い話研究会副理事補佐官代理の川村さんの専属ドライバーをやっております奥殿です」
川村「水」
高野「あ、奥殿さん。えぇ、私、あっ、囚人だったもので名刺持ってませんでした。すみません。言い出したの私なのに」
奥殿「はははは。大丈夫ですよ」
高野「高野です」
奥殿「高野さん。よろしくお願いします」
高野「よろしくお願いします」
雑談をしながらはけていく高野・奥殿。
残される川村。
川村「こわいよぉ」
おしまい

『ラーメンにのめりこむ話』作・玉井秀和

父と娘シリーズ

娘「とうちゃんとうちゃん」
父「どうしたんや、あやこ」
娘「あやこのドロップ知らんか？」
父「あやこ。それはなドロップちゃう。おはじきや」

間

娘「なんやそれ」
父「なんでもない。何もなかった。父ちゃんはドロップ知らんで」
娘「もうちょっと残ってた思うんや」
父「なんや、あやこ。ドロップ好きやったんか」
娘「そうや」
父「何味のが好きなんや」
娘「そんなんハッカに決まっとるやろ」
父「ハッカ？」
娘「あたりまえじゃ」
父「ハッカなんか？」
娘「ハッカじゃ」
父「ハッカ好きなんか、あやこ。渋いなぁ」
娘「何言うとんねん、とうちゃん。いちごもメロンも、ハッカを際立たせるためのバーターや」
父「バーターやったんか。とうちゃん、イチゴがメインやと思っとったで」
娘「とうちゃんはおこちゃまやな」
父「あやこはませとるなぁ」
娘「とうちゃんは好きな食べ物ないんか？」
父「あるで」
娘「なんや？」
父「ラーメンや」
娘「ええなぁ」
父「ええやろ？」
娘「ええ」
父「豚骨が一番や」
娘「何言っとるんやとうちゃん。味噌や」
父「味噌！？」
娘「味噌や」
父「味噌！？」
娘「味噌やろ」
父「味噌ちゃうやろ」
娘「何言っとるんや。味噌が一番複雑な味がするんやで。甘みも苦みもバランスがええんや」
父「あやこはませとるなぁ」
娘「とうちゃんがおこちゃまなだけやで」
父「せや、あやこ。一緒に理想のラーメンをつくろう」
娘「なんやそれ」
父「あんな、理想のラーメンを絵に描くんや」
娘「ええな。お絵描きするで」
父「よし、あやこ紙とクレヨン、用意しぃ」
娘「待っとってな」

娘、紙とクレヨンを持ってくる。

娘「用紙できたで」
父「よし。まずはスープじゃ」
娘「何言っとるんや、とうちゃん。ラーメン屋はまずはどんぶりをこだわるんじゃ」
父「どんぶり」
娘「そうじゃ。スープまで飲みやすいように、ふちがちょっと丸みを帯びたどんぶりにするんや」
父「なるほど」
娘「そんでなそんでな。味噌の茶色と統一感を与えるために器も茶色なんや」
父「考えとるなぁ」
娘「それ以上は余計な装飾はいらん。必要以上の見た目は、ラーメンの味を邪魔するんや」
父「父ちゃんは竜の絵とかあったほうがええけどな」
娘「愚の骨頂や。スープ飲んでいって竜と目が合ったら気まずいやろが。ラーメンを食べてる間は自分とラーメン。二人だけの対話なんや。プライベートな空間なんや。そこに竜はいらん」
父「ぐうの音も出ん」
娘「ここまで来てようやくラーメンや。まずはスープや。もちろん合わせ味噌や」
父「豚骨の可能性は――――」
娘「味噌はこのためにあわされた特別のやつなんや。でもこれは企業秘密やからここでは教えることはできん」
父「そうか」
娘「次は麺や」
父「味噌と言ったらちぢれ麺やな」
娘「味噌と言ったらちぢれ麺やとみんな思っとる。常識を疑ったことのない愚者共じゃ。本当は少しウェーブがかったくらいで十分なんや。麺の味も味わってもらいたい」
父「うん」
娘「そしてトッピングや」
父「うん」
娘「もちろんハッカや」
父「うん？」
娘「味噌だけだと爽やかさが出ん。それをハッカで出すんや」
父「ハッカはあかんやろ」
娘「みんなそう思うとる。だからこそのハッカや。むしろハッカや。逆のハッカなんじゃ」
父「あやこ。あやこ」
娘「どうしたんやとうちゃん」
父「ラーメン、食べに行こうか」
娘「ええんか？」

父「今日は特別や」
娘「いく」
父「じゃああやこ。準備してきぃ」
父は安堵するのであった。

『研究室』作・奥殿純

奥殿
内藤
有働

研究室の中の少し休憩できるスペース
となりの部屋が実験室となっている
始業時刻より少し前、内藤、やってくる
かばんを置きコーヒーを飲んでくつろぐ

そこへ有働が白衣を着て実験室から帰ってくる

内藤「あ」
有働「おはよう」
内藤「おはようございます。早いですね」
有働「(白衣脱ぎながら)いや、早いっていうか、、」
内藤「え、帰ってないんですか」
有働「うんー終わんないんだよねー実験」
内藤「だめですよ帰んないと」

有働、ふうーと息をはきながら、目につけて蒸気が出るやつを付けて、内藤近くに腰掛ける。

内藤「コーヒー飲みます？」
有働「ほんと？ありがとう」
内藤「(コーヒー淹れつつ)でも有働さん聞きましたよ。今度の北京の学会呼ばれたって」
有働「ああまあね」
内藤「上中さんと有働さんだけなんでしょ。さすがですねー」
有働「そんなことないよ」
内藤「准教昇進もすぐじゃないですか」
有働「そんなことないって」
内藤「絶対そうですって」
有働「いやいや」
内藤コーヒーを渡しかける
有働「ありがとう(コーヒーを受け取ろうとするが内藤が手を離さないので取り合いになる。
蒸気のやつはどこかで外す)ん、ん、どした」
内藤「そんなことあります」
有働「え」
内藤「そんなことあるんです」
有働「え、なにが」
内藤「(泣き声で)そんなことあるの…」
有働「え、どうしたの…座る？座ろう。な。ほら飲んで」

内藤コーヒーを飲むがそのままカップに吐き出し、それを

有働「うわあ…」
内藤「あ、これ(有働に渡す)」
有働「いや、いいよ。それも飲んで」
内藤「いやでも。これ有働さんのだし」
有働「いや新しいのいれるから」
内藤「……汚いからですか」
有働「いや、別にそういうわけじゃ」
内藤「いやそうでしょ汚いっておもってるんでしょ」
有働「…(しばし考えて)んまあ綺麗か汚いかで言えば」
内藤「やですか」
有働「…(しばし考えて)んまあ嫌か嫌じゃないかでいえば」

内藤しばらく考えて、帰り始める

有働「え、え、まってどこいくの」
内藤「かえります」
有働「え、なんで」
内藤「いやなんでしょ、私のコーヒー」
有働「いや、だってそれはさ」
内藤「わたし事務員ですよ。事務員なんてただいるだけじゃないですか」
有働「そんなことないでしょ」
内藤「朝きたら、あー今日のランチなに食べようかなー。昨日ハンバーグだったしー今日は
カツカレーかなーっていうのを考えてるだけじゃないですか。それでお昼終わったらおやつ
じゃないですか。そしたらおやつ何食べようかなーって考えるじゃないですか。でもお中元
のフィナンシェあるじゃないですか」
有働「そうなんだ」
内藤「そんな事務員の唯一の仕事が、コーヒーをいれることなんです」
有働「いやそんなことはな…」
内藤「悪魔のように黒く、恋のように甘いコーヒーで皆さんをいやしたい。研究の疲れを少
しでも和らげてあげたい。そんな思いで、コーヒーを…(泣いちゃう)」
有働なぐさめようとする
内藤「…あたし今日…いりなんです」
有働「(聞き取れず)ん？ん？」
内藤「生理なんです」
有働「あ…あそうなんだ。あじゃあよかった」
内藤「よかった？」
有働「あいや、今日ね内藤さんちょっといつもと違うからどうしたんだろうってねちょうど
思ってたから。いやーなんだ生理かー安心したあ。生理万歳」
内藤「最低…。有働さんってデリカシーないですね。意外と」

内藤コーヒーを片付け始める

有働「え捨てちゃうの」
内藤「はい。飲まないですよね」
有働「いやいや飲むって。せっかく入れてくれたし」

内藤「無理しなくていいですよ」
有働「いや飲むって。悪魔のように黒く、地獄のように熱く、恋のようにあま」
内藤「やめてください。そんなのやってません」
有働「のむって！。貸して」
有働と内藤がコーヒーを取り合いになる
取り合った結果有働にかかってしまう
内藤「あ」
有働「あっつ」
一通りやりとりした後有働の服を脱がせるところまでいく
内藤「これも脱いじゃったほうがいいですよ」
内藤がばっとシャツを脱がせる
有働「あ、ちょっと。研究でなまりきった、あ、研究でなまりきった身体が！！（照）」→このまま有働照れのポーズで止まる
内藤「（身体をじっくりながめ）ほおーーいいねえー。全然なまってないじゃん。」
博物館の彫像を見るように有働の周りをまわりながら見る。たまにさわってみたりしてもいいし、ケータイで写真撮ったりもする。最終的に有働と同じポーズをしてみたところで
有働「なにやってんの」
内藤「ああごめんなさい。つい」
なんやかんやで二人で椅子に座ってコーヒーをのみはじめる
内藤「いい匂いする」
有働「コーヒーの匂いっていいよね」
内藤「（目を見つめながら）ううんコーヒーじゃない」
有働「コーヒーじゃないの？」
内藤「うん」
有働「なんだろ」
内藤「（有働をにおう）」
有働「え、おれ？」
内藤「うん有働さんだ」
有働「おれ昨日お風呂入ってないよ」
内藤「うんでもいいにおいする」
有働「そんなことないと思うけどな。なんでだろう」
内藤「（匂っている途中で紙を見つけて）あ、そうだそういえば来週研究室対抗のソフトボール大会ですよね」
有働「ああ、そっか。来週か」
内藤「頑張って下さいね」
有働「うん。今年こそ一勝くらいしないとなー」
内藤「あれ去年勝ったって言ってなかったですか」
有働「勝ってないよ。初戦三浦研だったんだぞ」
内藤「三浦研って今年も強いんですか」
有働「いやあそこずりいんだよ。なんかパウエルってやつがずっといるんだよな。五年くらい」
内藤「へえパウエル。なんかソフトボールってポジションがあるんですよね、フォワードみたいな」
有働「え、なに全然知らないじゃん」
内藤「全然知らないんですよ～」
有働「なんでそんなうれしそうなの」
内藤「どこなんですか有働さんポジション」
有働「ライト」
内藤「ライト？ライトってどこですか」
有働「ライトは英語のライトだから右側でしょ」
内藤「え、じゃあこっちらへん守ってるんですか」
有働「いや逆逆。そっちレフト。ライトはこっち」
内藤「それ左じゃないですか」
有働「いや違うこっちが右」
内藤「え、わかんない」
有働「いやだから」
内藤「（有働、裸。おへそを指して）これホームベースとするじゃないですか。えーとこっちが一塁？」
有働「いや逆逆。こっちが一塁」
内藤「あこっちが一塁。てことはこっちが三塁」
有働「そうそう。で、右っていうのは守ってる側からじゃなくてバッター、ホームベースから見て右側なの」
内藤「あ、そうなんだ。じゃあライトはこっちだ」
有働「そう。でライトは外野だからもうちょい上かな」
内藤「もうちょい上？」（この時点で指はまだ乳首到達していない）
有働「うんもうちょい」
内藤「このへん？」
有働「いやまだ前進守備だな。もうちょい」
内藤「えじゃあこのへん？」
有働「ああ！いきすぎ！おっとーこれはずいぶん深い守りだ。相当警戒している様子。これはすごいバッターに違いない！打席に見えるのは、内藤選手！」
このあと身体でソフトボールゲームをしばし行う
有働「ゲームセット！3対2で我が吉田研の勝利！放送席放送席～ヒーローインタビューです。内藤選手、優勝おめでとうございます」
内藤「ありがとうございます」
このあたりから奥殿登場し始めるか

有働「見事なホームランでした。感触はどうでしたか」
内藤「最高に気持ちよかったです。イッたーとおもいましたね」
有働「最高の飛び具合でしたね。こんな気持ちいのははじめてでしたか」
内藤「いや一応はじめてではないです」
有働「ちなみに初めてはいくつくらいのときでした」
内藤「はじめては小学校六年のときです」
有働「それではかなり久しぶりだったんですね」
内藤「いやーほんとに満足です。ありがとうございました」

有働がわかりやすく二度見する
三人止まる

二人「あ…」
奥殿「…え、なにやってんの……アダルトビデオのインタビュー？」
有働「いやちがうちがうちがう」
奥殿「いや違くないでしょ」
有働「いや違うんだよ」
奥殿「違くないだろ」
有働「違うって」
奥殿「違くない」
有働「違う！」
奥殿「違くない」
有働「盗み聞き！」
奥殿「たまたま！」
間
有働「どっから聞いてたの」
奥殿「いや聞いてたってこっちが悪いみたいな言い方するなよ。たまたま聞こえたんだよ」
有働「どっから聞いてたの」
奥殿「聞こえたっつってんだろ」
有働「聞いてた」
奥殿「聞こえた！」
有働「東京！」
奥殿「有楽町！」
有働「新橋！」
奥殿「浜松町！」
有働「田町！」
奥殿「品川！」
有働「大崎！」
奥殿「目黒！」
二人「ぶー！大崎の次は五反田でした」
有働「ちなみに五反田は風俗店が多いでーす」
奥殿「知らねえよ。てかほんとなにやってたの。初めてはいくつのときですか？」
内藤「小学校六年のときです」
奥殿「いや、早いな！さっきも思ったけど早いな。六年！？六年なんてドッジボールしてたよ！」
有働「いやとにかく違うんだって」
奥殿「なにがちがうんだよ。その裸説明してみろよ。それともまさかあれか！インタビューだけじゃなくその前とか後も！！」
有働「違うって！ここでそんなことするわけないでしょ。てかなんでそんな怒ってんの」
奥殿「怒るでしょ。だって俺ははるかと付き合っ…」
内藤「まあまあまあ。東京」
有働「神田」
奥殿「うっ…逆回り」
有働「えー」
奥殿「逆回りはずるいぞ」
有働「それなに」
奥殿「ああ…いやこれお前にだよ」
内藤「えわたしに？」
有働「えなにプレゼント？」
内藤「（プレゼント開ける）…なにこれ（生理用品が出てくる）」
奥殿「今日から生理でしょ。だから」
内藤「…え、なに（一瞬怪訝そう。だが、）めっちゃいいやつじゃん。プレミアムじゃん」
奥殿「そうだよ」
内藤「えこれめっちゃほしかったんだよね。よく見つけたね」
奥殿「そうでしょ。おれ頑張ったでしょ」
内藤「頑張ったね～じゃあごほうび（お菓子を投げる。奥殿が口でキャッチ）」
内藤「はいおいで」

奥殿犬になりすり寄る

内藤「お手。おかわり。一周回ってワン。よしよし～」

奥殿立ち上がりものすごくどやる
有働ドン引き

（終わり）

『女性の目を惹く仕草』作・玉井秀和

父と娘シリーズ。《いとこのひろちゃんが来る》

娘が遊んでいる。
そこにひろちゃんが帰ってくる。

ひろちゃん「すみませ～ん。こんにちは～」
娘「あれ、ひろちゃんや。なんやいつ帰ってきたんや？」
ひろちゃん「ついさっき帰ってきたよ～。おおきいなったねぇ。あやこちゃん」
娘「せやろ。とうちゃんのくるぶしと同じくらいなんやで」
ひろちゃん「くるぶしって、ここやで？」
娘「え、嘘や。ここやろ？」
とうちゃん「そこは鎖骨じゃ」

やや間

娘「またとうちゃん、嘘つきよった」
ひろちゃん「かわいがられとるんよ」
娘「こんなん、かわいがっとるんちゃうわ。相撲のかわいがりと一緒じゃ」
ひろちゃん「それにしても、こっちは暑いなぁ」
娘「何言うとんねん、ひろちゃん。こんなんまだまだへっちゃらやで。これからもっと暑なんねん」
ひろちゃん「あやこちゃんは強いなぁ」
娘「街は暑ないんか？」
ひろちゃん「暑いで～。でもこっちのほうがなんか暑いわ～」
娘「どこもかしこも暑いなぁ」
ひろちゃん「なぁ。とうちゃん、おるか？」
娘「畑に行っとんねん。呼んでくるか？」
ひろちゃん「ええよええよ。急いどらんけん。待っとるよ」
娘「そんなとこにおらんと、あがりいな」
ひろちゃん「そぉ？　ほんならちょっと失礼して」
娘「いま、お茶もってくるな」
ひろちゃん「ええよええよ」
娘「ええことないやろ」
ひろちゃん「ええよ。気ぃつかわんで」
娘「気ぃつかっとらんわ。マナーモードなんじゃ」
ひろちゃん「なんじゃそれ」
娘「マナーモード中は、ちゃんとやらんとヴァイブレーションするんねんよ。ヴ―。ヴ―ってなるねんよ」
ひろちゃん「振動しとる振動しとるよ」
娘「怖いやろ？」
ひろちゃん「怖いわぁ」
娘「だからお茶を持ってこなあかんねん」
ひろちゃん「そんなら、持ってきてもらおうかな」
娘「待っとってな」

娘、お茶を取りに行く。
緩やかな時間が流れる。
娘、お茶を持ってくる。

娘「なかったわ」
ひろちゃん「うん。ありがとう」
娘「マナーモードやねんで」
ひろちゃん「あやこちゃんは立派やねぇ」
娘「こんなん立派でも何でもないで」
ひろちゃん「立派やで～」
娘「立派ちゃう」
ひろちゃん「立派やんか」
娘「立派ちゃうやんか」
ひろちゃん「なんでぇな。立派でええやんか」
娘「あんなひろちゃん。それは甘やかしじゃ。人間甘やかされると駄目になるねんで」
ひろちゃん「そんなんどこで習ったんじゃ」
娘「甘やかしは毒じゃ。トキのかぶった死の灰なんじゃ。じわりじわりと肉体を蝕ばんで行く。でもな、トキは守ったんや。ケンシロウを、罪のない人々を。そんでな、弱り切った身体でトキは戦うんや。ラオウを逃がさんように、自分の足とラオウの足を剣でグサってやるんじゃ」
ひろちゃん「うん。立派やない。あやこちゃんは立派やない」
娘「そうや」
ひろちゃん「全然、立派やないで。そんくらいで図に乗らんほうがええでよ」
娘「そうや、ひろちゃん。それでいいんや。浸みる。浸みてる。あやこは今、うどんじゃ」
ひろちゃん「うどん？」
娘「すき焼きのたれが浸みこんだ、うどんなんや」
ひろちゃん「そうなんか。よかったなぁ」
娘「ありがとう、ひろちゃん。甘やかさんとってくれて」
ひろちゃん「こんなんでよかったんか？」
娘「うん。救われた」
ひろちゃん「そうか。ようわからんけど、よかったわ。うちも気を付けるな」
娘「うん。ひろちゃんも気を付けたほうがええで。人間は怠惰な生き物やけん」
ひろちゃん「うん。気を付ける。それにしても、大きいなったなぁ」
娘「せやろ」
ひろちゃん「うん」
娘「ひろちゃんも大人っぽうなったで」
ひろちゃん「そうか？」
娘「うん。制服のせいかな。えぇなぁ、制服」
ひろちゃん「どう？　似合っとる？」
娘「あ、なんやその動き」
ひろちゃん「なにが？」
娘「今男を意識しよったやろ」

ひろちゃん「しとらんよ」
娘「いいや、したで。あやこにはわかる。あれやろ。好きな男がおるんやろ」
ひろちゃん「おらんよそんなん」
娘「分かっとる。あやこにはわかっとるで、ひろちゃん」
ひろちゃん「なにがや」
娘「あやこには何も隠さんでええねんで」
ひろちゃん「何も隠しとらんて」
娘「分かっとるて。男の目を惹く仕草を学びたいんやろ？」
ひろちゃん「わかっとらんで。あやこちゃんは何もわかっとらんで」
娘「あやこにまかせぇ」
ひろちゃん「あやこちゃん」
娘「まずはな、違和感や」
ひろちゃん「なんや違和感って」
娘「相手にな違和感を与えることで気を引き付けるんや」
ひろちゃん「どうやってやるんや」
娘「あんな。不自然に隣に座るんや。そうすれば、男は勝手にそれに意味を見出す」
ひろちゃん「そうかぁ？」
娘「間違いない。男は単純なんや。ほら、やってみぃ」

ひろちゃん、やる。

ひろちゃん「こうか？」
娘「ええで、ひろちゃん。次はな、アンニュイを出していくんや」
ひろちゃん「なんやアンニュイって」
娘「それはわからん。わからんけど、アンニュイがもてるんや」
ひろちゃん「そんなわからんのどうやって出すんや」
娘「じっと相手の目を見つめるんや」
ひろちゃん「こうか？」
娘「あ、やめい。そんな純粋な瞳であやこをみんといてくれ。浄化される。あ、やめちゃあかんねんで」
ひろちゃん「むつかしいなぁ」
娘「ええで、ひろちゃん。ひろちゃんは可能性の塊じゃ。玄武岩じゃ」
ひろちゃん「玄武岩はいややなぁ」
娘「そんでな、ちょっとだけ口を開けるんがコツや」
ひろちゃん「口開けると阿呆に見えるねんで」
娘「そこがテクニックじゃ。完璧過ぎると逆に近づきにくい雰囲気を与えてしまう。だから少し抜けを作るんじゃ。これが緊張と緩和じゃ」
ひろちゃん「研究しとるなぁ」
娘「そんでな、これはとっておきやで」
ひろちゃん「なんや？」
娘「あやこが考えた特別なやつやけん、いわんといてぇな？」
ひろちゃん「言わん言わん」
娘「絶対やな」
ひろちゃん「絶対や」
娘「あんな。手を５回叩くんや」
ひろちゃん「手を？」
娘「そうや。５回っていうのが大切なんや」
ひろちゃん「なんでや？」
娘「これはな。アイシテルのサインなんや」
ひろちゃん「ドリカムや」
娘「どうやすごいやろ」
ひろちゃん「あやこちゃん。ドリカムじゃ」
娘「なんじゃドリカムって」
ひろちゃん「あるんじゃ。もう世の中ではメジャーなんじゃ。メジャーすぎて実際はもう誰も出来んのじゃ」
娘「やられとるんか？」
ひろちゃん「ミリオンヒットじゃ」
娘「やられた」
ひろちゃん「やられたなぁ」
娘「じゃあ、何度でも何度でも声がかれるまで名前を呼ぶのはどうじゃ」
ひろちゃん「ドリカムじゃ」
娘「これもか」
ひろちゃん「もろじゃ」
娘「ドリカムは手ごわいのう」
ひろちゃん「恋愛の手法はすべてドリカムが作り出しとる」
娘「うえー。もうええぇ。どっちもやったらええねん。最終的にはアピールが強かったらえぇんじゃ」
ひろちゃん「急にごり押しやで、あやこちゃん」
娘「あたりまえやろが。最後はごり押しじゃ。テクニックとかに頼っとるからあかんのじゃ」
ひろちゃん「あやこちゃんが言い出したんやないの」
娘「テクニックなんぞ甘えじゃ。甘えは人を蝕むんじゃ」

父が帰ってくる。

父「何さわいどんのや、あやこ。あれ。誰かと思ったら、ひろなちゃんやないか」
ひろちゃん「おっちゃん、あやこちゃんに何教えとるんや」
父「なにがや」
娘「今な。ひろちゃんに男の目を惹く仕草を教えとったんや」
父「あやこはそんなんもできるんか」
娘「とうちゃん。みとってぇや」
父「おう。みしてみぃ」
ひろちゃん「えぇ、うちはやらんよ？」
娘「こういうのは実践あるのみじゃ。ほれ、ひろちゃん」
ひろちゃん「いやじゃあ」
娘「甘やかしは、毒じゃ。あやこはひろちゃんの為にやっとるねんで。ほらいくで」

丁度三味線が流れてくる。
ひろちゃん、する。

娘「どうじゃ、とうちゃん」
父「あやこ。ええなぁ」
おしまい